

街の中で



鈴木圭介

会津まつりの白虎行列を見物に出かけ、雑踏を避けるため家具店にプラーリと入った時のことである。うしろから「先生」と呼びかけられたので振り返ると、続けざまに「覚えていますか。」とにこにこしている。数年前の会女の卒業生らしいが名前を思い出せないまま「やあ、覚えているとも…」と答えてしまった。しまったと思っただけでも遅い。「たしか……君は鈴木さんだね。」と言うと、「ええ。」とうなずく。しめたかと思つて、「鈴木日子さんだね。」とかすかな記憶を頼りに言うのと、「覚えていらつしやつたんですかあ。」と感激している。

彼女が高校一年の時に生物を教えただけの生徒なので、教室でのつきあいから八年ぶりである。家具店内でもあったので、「もう、そろそろ結婚かな。」と言うと、「今年の秋です。」と明るい答えがもどつてきた。彼女にとつて、人生でもっとも希望に満ちた幸福な時でもあり、自分の幸せをいっしょに喜んでもらいたくて私にまで声をかけたのだらう。しばらく立ち話をして別れたが、名前を思いだせてほつとした気持ちで店をでた。

「クラス担任でも担当学年の生徒でもないのによく覚えていられるね。」などと妻が言うので、調子にのつて、「生徒の名前を覚えなくて教育がはじまらないよ。」などと大きくでた。しかし、このあとが悪かった。しばらく雑踏を歩いて行くと、すれちがった青年から声をかけられたが、困つたことに顔に全く見覚えがない。こちらが当惑したよう

な顔でもしたのだらう。青年は、「田島高校で一年生の時だけ教わつただけだからなあ。」と私が彼の名前がわからないのもしかたなし、と言つた口振りであった。

このような場合、同級生や担任の名前などの話をしていううちにたいてい相手の名前も思い出すか、最初より相手を知っているようにするのだが、この場合は全く自信がなかった。とうとう、「誰れだつたかなあ。」と聞くより方法がなかった。

Y青年は現在函館管林局に勤務していて久しぶりに休暇をとり会津にもどつていふことだった。聞けば、一年生で教え、二年になる時に私が転任したとのことであるので、十年ぶりである。

イガグリ頭の高一年生が、りっぱな青年に成長しているのだから、わからなくなるのも当然などと自分に言い聞かせて、Y青年と別れたが、後味が悪くてしかなかった。

教師をしていると、このような場合がよくあるのだが、そのたびに私は高校時代に教わつた世界史のN先生の教えを思いだす。

「卒業してから、学校を訪ねたり、先生に会つて話をする時は必ず自分の名前と卒業年度を名のつてから話をはじめなさい。」と教わつたことである。私はこの教えを守っているので恩師からは「君のことは知っているよ。」などと言われ、いつも気分よくしている。私

はこの教えを教え子に教えることにしている。Y青年が名のつていてくれたら、お互いに後味の悪い思いをせずにすんだものと残念に思つた。H子はこの次もまた私に声をかけてくれるだらう。そんな気がする。

卒業生とのつきあひのはじまりは、声をかけたり、名前を覚えていたりすることからはじまるようである。長らく教師生活をしていると地域社会の人たちや卒業生や父兄との結びつきができるが、特に卒業生とのつきあひは楽しいものである。顔だけ知つており、名前も知らぬ人とはつきあひなど生まれないように、学校でも教師が生徒の名前を覚え、よく生徒を知つてはじめて適切な指導や心のふれあひを求めることができるのではあるまいか。ところが、残念なことに、大規模の高校では、接する生徒も多く、教師が生徒の氏名を覚えきれないようである。同じ校門を毎朝ぐりながら、一度も教えない生徒や習わない先生、同級生でありながら顔さえも知らない生徒同志、これでは連帯感ほもとより愛校心や友情も育たず、かえつて疎外感を持つ生徒がでてもしかたがないと思う。学校規模や教師側の姿勢にも問題はあがるが教師が生徒の氏名を覚えられなくなりはじめたら、知識の切り売りをする単なる職人になりさがつてしまふ時だと自らを戒めている昨今である。

(福島県立会津女子高等学校教諭)